
僕の一步

ゼット

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の一步

【Nコード】

N7473E

【作者名】

ゼット

【あらすじ】

僕の半生です。書いてるうちに泣けてきました。今でも胸が痛い。人に裏切られ裏切られ裏切られ裏切られ何度もうさされているにまだ人を信じつつける自分を見てるとなんとも言えなかった。突然小説を書いたのです。

この話はけっして嘘ではないですが嘘と思われるのならそれでいいです。恐らく、この俺が初めて書く小説なのでどうか少しのご理解を御願います。

俺は大阪のとある町で生まれました。俺が生まれた時それはそれはみんなが泣いたと祖母に聞かされました。僕は小学生の頃まで本当に普通の少年でした。

僕

「誰が一番好き？」

祖母

「あんた以外に誰おる？」

僕は本当に祖母が大好きな少年でした。

ですが大きくなるにつれて母親が突然祖母の家に行くなと言ったのです。

何故かわかりませんでした僕は本当に楽しくて いつも祖母と居る時間が幸せだったのでいきなり打ち消されたのです。

まもなくして僕は祖母にその事を言うと休みの日になると家に遊びに来てくれましたそれで僕は頑張ろうという気になれたのです。

小学生の高学年にもなると祖母もあまり来てくれなくなつて僕は寂しがり屋だったので胸が痛む日が続きました。

その時、何故母親は僕に祖母の家に行くなと言ったのかわかりました。

僕には妹が居て兄ばかり可愛がってもらうといけなからとの理由だったのです。

僕はまあ仕方ないか。

と毎日過ごしていましたが、こう思い始めた時から家では差別が起こり僕は何もしていないのに叩かれたり何か気に触る事があれば出て行けといわれたのです。

訳がわからなかったのですが友達の家に行って遊んで帰ってくるのが普通でした。

そしてそんな日ばかり続いて僕はついにキレてしまい、何もかも叫んでしまったのです。

我慢している事が体にきて呼吸困難になりそれでも叩かれたり殴られたので自分でも狂ったのかと言うほど叫んでしまったのです。

自分はやってしまったと思いますすぐさま父親と母親に追い出されました。

その時友達が留守だったので祖母の家に行ったのです。

僕は一生懸命に祖母に事情を説明したのですが祖母はそんな事はありえないと言い僕を説教するのです。

何故？その時僕は何か大きな勘違いをしていたと気がついた様でしたが後になるまで受け入れませんでした。

受け入れなくなりました。

そしてついに父親が迎えに来て殺されると思った僕は逃げ惑ったのですが最終的に祖母に騙されて車に乗せられ自宅に戻りました。その時僕はひどく言われ、暴力はなかったのですが気が遠くなる程正座されて何故だろうと一人考えていました。今思うとやはり悲しい出来事です。その時僕は大人になれば必ず良いつて事になると思っていたので。それから言うもの僕は今まで持っていた親への尊敬の念から恐怖の念へと変わりました。

僕は小学生ながらもいつでも死ぬ覚悟を出来るようにしとかねばと思ったのです。

いきなりの事に自分自身深く悲しく傷つきました。

それからというものは大きな変化はなく僕は胸を痛め続け事ある事に涙もろくなつてしまいました。

ですがある日父親から突然の誘いがあり芸能スクールみたいな所に行ってみないかというものでした。

僕は断ると生存出来なくなる恐れがあると気づき父親に行くと断ってしまい結局兄弟で入る事になりました。

もうこれ以上やめてほしいていう気持ちだったのですがやるだけやりました。

すると何かまた両親が違う芸能スクールみたいな所を探してこつちにつれと言うのでうつったのでしたするとその芸能スクールのオーディションを僕は特待生で受かってしまいました。

何が良かったのかわかりませんでした。驚くべき事だったと思います。

ですがやる気ともう嫌気が刺して僕はやめました。

3カ月ぐらい行ったと思います。

それから言うもの地獄はなくなつたと思いました。

本当に嬉しさがましてきて学校の友達と遊べると思つたのです。しかしこれからが地獄だったようです。学校に次の日から行くと何故かいじめられ、私物がなくなつたり無視されたり本当に嫌な思いで一杯でした。何故そんな事をするのかわからず苦悩しました。苦悩の末に友達に言ってみると、普通に対応してきて

「誰がそんな事してる？」と言われ僕は変に思い過ぎなんだと思いました。それから友達に謝った日からというもののクラスの大部分から敬遠がられもうとても耐えられなかつたので教室の真ん中で泣いてしまいました。僕は必ずしも泣かずにいようと心に決めたのですが本当に辛く苦しく泣くぐらいなら死んでやると堅く誓つたはずでした。それから毎日毎日自分はちよつと危ない奴みたいな感じで見られ学校をたまに休んでしまいました。もう限界だ。死のうと思ひ。その時僕は何度も何度も死に場所を探して色々うろついたりどこか殺してくれる人はいないかなと探しました。そんな時に祖母に相談してみようと思ひ祖母に相談してみたのです。すると祖母は神様に頼んであげるから学校に行きなさいと言ひそれだけ言つて電話を切るのです。もう神様が守つてくれるから僕は大丈夫と思うしかありませんでした。僕はそこまで精神的に追い詰められ母からも次休んだら精神病院に入れると言われたのです。それからというものの僕は本当に頑張りましたがクラスの生徒には可哀想な子なんだと

思われていたに違いなかったです。

僕が話に入るといきなり会話が止み死ねなどと言われたり気を使つて話されたり本当に嫌で嫌で仕方ありませんでした。

僕は本当に何を悪い事したのですか。

それを知りたかった。

それから小学校を卒業して中学に上がり部活に入ったのですが色々な以前の僕に偏見を持ってかまたみんなに避けられたのです。

それでも頑張ろうと思ったのですが無理でした。

体が持ちません。

タフな人ならわかりませんが、僕は本当に弱い人間で胸が痛むと自分で刺したくなるぐらい痛むのです。

もうこれ以上僕は生きる資格はないと思い不登校になりました。

母からも父からも妹からも見捨てられ僕は一人で引きこもりました。幸いにも家には居させてくれたのですがだんだんと家族からの嫌がらせも過ぎてきて住みずらくなったのでした。

そして1年が過ぎて2年が過ぎ卒業まじかになっても学校に行かずにいるとある親戚の人に僕は高校に行きたいと言っていたのでその親戚の人とある有名高校のパンフレットをもらいその有名高校の知り合いの人に受験手続きをもらったのでした。

僕はその時はもう考えるという思考はありませんでした。

そして行きたいと必死に返事だけして受験しました。

そこはなんと寮生活で家と離れて暮らすらしいのでした。

受験した結果は合格でこの時だけは家族全員で喜びました。

僕の少し胸の痛みはとれたのです。

そして中学校の卒業式がありました。

この時僕は本当にどれだけこの卒業式に行きたかった事かと家から飛び出し近くの草村で一人何時間も泣いていました。

本当に中学生生活は楽しいもんだと小学校の時に思っていたからです。この中学3年間は楽であり自分は不登校だったので毎日が孤独との戦いでした。

幸いにもネットがあつたのでネットをしていました。

本当に幸い中の幸いだったと思います。

そうして高校の入学式に行くとかやはりそこは大きな高校なのでたくさんさんの生徒が来ていました。

僕は不登校だった事を打ち明けなかったのですが寮生活に入りとても不安になりました。

何とも家が恋しくなつたのでした。何で？と僕は寮のベッドの中で自問自答しましたがやはり家が恋しくていますぐ帰りたい衝動が止まらなかつたのです。僕は今にも不登校だった事がバレてみんなから外されると思いました。寮生活で外されるとんでもない事になる事はわかっていました。それも怖くて逃げていたのです。そうして寮生活に慣れていき部活に入り先輩や同級生の楽しい日々を毎日過ごしました。

何とも部活の監督がとてつもなく強い人だったので僕はその人と対話をしてから生きてゆける自信をもてるようになりました。実際にこの人は僕のかげがえのない命の恩人です。しかし毎日を過ごしてるうちに家族からもう帰ってこないでと電話で言われ僕はショックを受け寮から脱走してしまつたのでした。それで家に帰り僕は両親からガミガミ言われ本当にあの時何故そんな事を言つたのか僕は聞きたくて話すと母が

「いい加減にこれ以上迷惑かけるな！その歳ならわかれ！」と言い父親も何度も同じ事を言うのでした。脱走したと言う事は僕は先輩や同級生や監督を裏切つた事になります。もう戻れないと悔やんでいました。父親と二人になり父親はガミガミ僕に言ってきたので僕はなんと自分でも思わず父親を痛恨の一撃をこめて殴ってしまいました。僕は目の前が真っ暗になり、気づくとパトカーの中にいて留置場でした。僕はハツと我にかえり何度も何度泣いて家庭裁判所まで行って鑑別所おくりになつたのでした。本当に僕はなさけなく鑑別所で両親に手紙を一通だしても返事がこないで捨てられたなと覚悟を決めたのです。その時から無理にでも鑑別所の飯を腹に入

れたのです。すると驚きました、両親が面会に来たのです。僕は正直嬉しかった。だが来てほしくなかった。もうこれで俺は自由になれたと思ったつかの間でした。色々と話をして鑑別所から出るまで両親はサポートしてくれて何とか鑑別所から出れました。そして高校はと言うと留年になっていて退学はありませんでした。本当に良かったと思います来年またあの高校を受けようと誓いました。ですが色々両親とまたもめてもうダメだと言われたので僕は祖母に言っ両親にお金を出してもらい祖父母に寮の近くの家に住んでもらう事になったのです。祖父母は納得してくれて次の年になって僕は高校に行ったのですが中学と同じ事が起こりましてや留年してたので誰からも相手にされませんでした。僕はもう学校を休みました。また不登校になったのです。とある寮の近くの家で不登校の日々が続きました。そして3カ月ぐらいたって祖父が帰ると言い地元に戻ってしまいました。僕は急に帰られたので泣いたのですが仕方ないかと思いました。そして祖母も学校に行かないんだったら帰ると言うので僕は仕方なく学校に行きました。本当に苦痛でした。みんなが楽しくしてるなか僕も楽しくしようとするとみんな離れてまた一人だけになったのでした。僕は毎日毎日こんな事をして頑張っているにも関わらず祖母の口から

「母親（僕の）も苦労したんやらなあ不登校なんかもつまんじやない」と言っていました。僕は仕方ないかと胸が痛くなりました。それからというものの祖母の愚痴と学校と毎日が地獄でした。そして僕にとって痛恨の一撃がありました。それは休みの日に祖母が無断で地元に戻ったいた事でした。僕はこの時捨てられたと確信しました。本当に悲しくて悲しくてあの祖母がこんな事をするなんてと思い自分の爪でそこらじゅうかきみしりガラスを割りそれで自分の体を傷つけてついに割れたガラスを手首のところに持っていたのでした。

俺

「もう悔いはない。これ以上生きて続ける事が迷惑だ。何故俺は生まれたんだ。何故俺はこの世に存在するのか。」本当に僕は悲しく

て悲しくて後悔しました。生涯忘れられない出来事です。そして何
度も何度もガラスでバサツとやろうと思うのですが出来ない。他の
ところは傷だらけで血が出てるのですが大動脈のそこだけはどうし
ても無理だ。自分は本当に胸が張り裂けそうだった。これ以上生き
たくない。生きてる事が俺にとって地獄だと。地獄はこれ以上見た
くない。もう嫌なんだ。本当に俺は普通の家庭に生まれたかった。
そう悟って大動脈を切ろうとしたのです。その時母親から電話がか
かってきて至急家に帰れと言われたのでした。切ろうと思ったので
すがやはり切れずに帰りました。浅はかに聞こえるかもしれません
が本当に自分の人生は例えるなら地獄だと高校生で思いました。僕
には居場所がない。僕には空気がない。僕には血も涙もない。そう
この時から何かが変わりました。DNAが変わったのです。僕は本
当にこれ以上は対応出来ないと思いとてつもない力でDNAが変わ
ったのだと思います。それからというものの地元の定時制高校に通い始
めもう今も通っています。ですがやはり両親は妹しか見ず何か事あ
るたびに出ていけと言われたり食料をくれない時があります。僕は
深く考えて具体的に方法を出して考えたのは祖母の家に住ませて
もらうという事でした。祖父母に色々な方法で説得して何とか住ませ
てもらえたのですが、やはり毎日が地獄でした。夜朝関係なく何も
してないのに祖父からのうるさいとの暴言。僕を追い出したいのは
わかります。もうすぐしたら僕の通っている高校も卒業できます。
ですが僕は決めました。

高校もやめて小説家で生きていこうと。

もう沢山の事に疲れしました。

どなたでもよろしいです。

一生懸命頑張ります。

この命ないものです。

もう僕には時間がありません。

どなたでもよろしいので小説家の方僕を雇って下さい。

本当にお願ひします。

僕は本気です。

勝手ながら申し訳ございません。

迷惑は必ずかけません。

逃げるつもりではないです。

その変わり僕は両親や祖父母には一切知らせずに小説家になるつもりです。必ずしも僕は小説を書く時か読む時が一番幸せだったので。PCさえあれば3時間ぐらいで小説も仕上がります。どうかお願いしますどなたか紹介して下さい。命をかけています。長文失礼しました。またご感想があれば頂戴下さい。ありがとうございました。

（後書き）

本当にお読みいただきありがとうございました。この歳で人間の醜さを悟ってしまい何故かこんな自分になってしまいました。ですが僕自身諦めていません。いつか親元や祖父母から離れて自立して小説を書ける日を夢見ております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7473e/>

僕の一步

2010年12月27日20時22分発行